

野鳥大判

—北海道—

第 2 5 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和52年1月21日



冬の大沼公園

昭和51年1月16日 撮影 梅木賢俊

羊ヶ丘の鳥

——開発進む中、96種確認——

四十万谷 吉郎

羊ヶ丘の概況

羊ヶ丘は図1のように札幌から千歳寄りの国道36号線に沿い、農林省北海道農業試験場、元の月寒種羊場の敷地約1100haをいう。この敷地内には農業試験場のほかに農林省の機関である林業試験場、家畜衛生試験場の各支場および横浜植物防疫所の支所がある。従って羊ヶ丘内はほとんど人の手が入っている。試験場の平坦部は、大部分草地、畑、果樹園となっており、その中に小規模な林が点在している。山の方は一部草地になっており、林試の一部および山部川寄りにはまとまった林があり、残りも畑地である。林業試験場の中心部は以前スキ、ハギ等の草原となっていたが、現在は幼木が植林され整備されている。

調査の方法

表1の観察記録は、当初まとめるということ念頭においていなかったため、特に系統的な調査を行なってこなかった。従って観察日は特に設けず、1971年から76年まで往復の通勤時、昼休みおよび土、日曜日の気のむいた時の探鳥の記録を寄せ集めたものである。

また、この記録は筆者一人のものではなく北大応用動物学教室の諸氏および農試内の先輩、同僚の情報をも活用した。さらに今回まとめた記録は1973年に北農試の場報にまとめたものに、その後の記録を補充したものである。

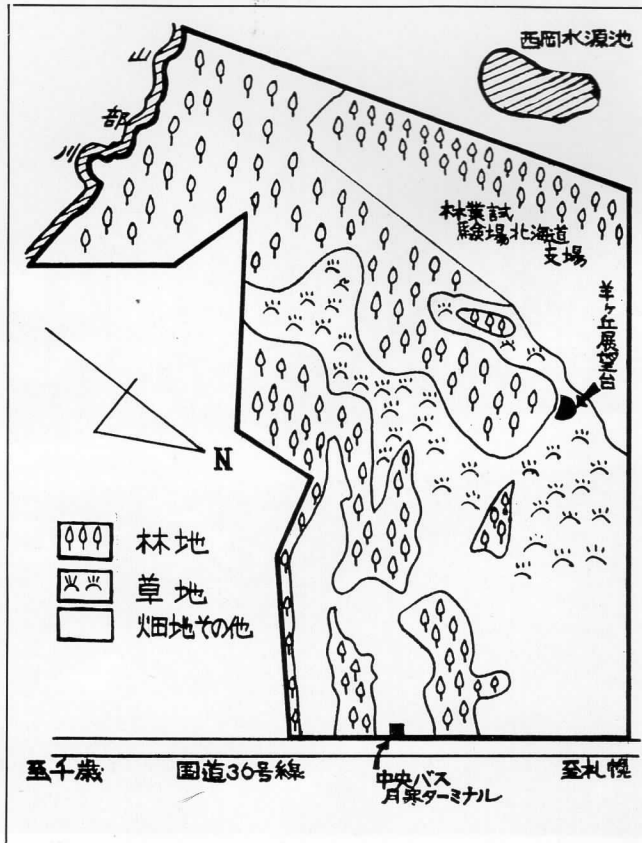
これまでの記録

これまで羊ヶ丘で記録された鳥は6年間にただ1回の記録のみという鳥も含めて32科96種である。種類数のみを取り上げるならば帯広畜産大学の藤巻裕蔵氏による北大第1農場

(1957~1961)、藻岩山(1957~1966)の調査ではそれぞれ74、71種が確認されており、羽田恭子さんによる円山の調査(1972~現在)においても97種が確認されている。それぞれの地域で環境、調査年次が異なるので同列に比較することはできないが、羊ヶ丘地域は鳥の豊富な地域であることがわかりいただけると思う。

棲息場所別での鳥の種類の違いは一般的に考えられている違いが見られた。しかし、羊ヶ丘には草地が多いにもかかわらず、草原で通常見られる鳥で確認されていないものも多く、草地で毎年確認できるものとして、ホオ

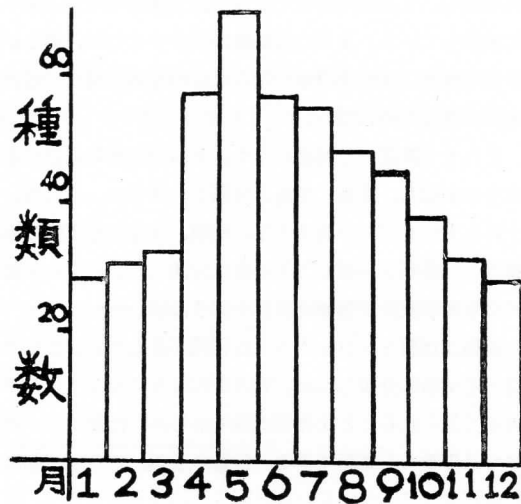
〔図1〕 羊ヶ丘(北海道農業試験場)略図



アカ、ノビタキ、ウズラ、ヒバリぐらいのものである。その他の草原性の鳥としてはオホジロ、ノゴマ、エゾセンニュウ、オオヨシキリが確認されている。

ホオジロは現林試支場が移転してくる以前の草原に毎年来ていた。しかし林試の工事が始まって以来、農試の草地に移動して来ていたが、今年は見ることができなかった。オオヨシキリは毎年5～7月にかけて2週間ぐらいずつ、わずかに残っているアシ原に1羽が来ているのみである。ノゴマは1976年5月に1度、林の中で確認したのみで、草地では確認していない。オオジュリンやノゴマが恒常的に見られないのは、人工的な草地に改良されているためだろうか。

〔図2〕 月別種類数の推移



月別の出現種類数

月別に出現する種類数を図2に示した。1～3月まで

〔表1〕 羊ヶ丘の鳥類 注…は途中一時確認もれがあるが、おおむねその期間生息していると考えられる場合

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ワシタカ	トビ ノスリ				—					—			—	
ハヤブサ	チゴハヤブサ				—				-----					
キジ	キジ ウズラ					—		—		—				
ライチョウ	エゾライチョウ													
ハト	キジバト アオバト			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ホトトギス	カウコウ ツツドリ ジュウイチ				—	—	—	—	—	—				'76年10月中旬夜に鳴声?
フクロウ	フクロウ コノハズク							—			—			
カワセミ	アカショウビン カワセミ							—	—	—				
キツツキ	アリスイ ヤマゲラ アカゲラ オオアカゲラ コゲラ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
アマツバメ	ハリオアマツバメ					-----								毎年夏～秋、上空を飛翔
ヨタカ	ヨタカ					—	—	—	—	—				
ツバメ	ツバメ イワツバメ				—	—	—	—	—	—				'72 '72
ヒバリ	ヒバリ			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ヒヨドリ	ヒヨドリ													
モズ	モズ アカモズ	—			—	—	—	—	—	—	—	—	—	'72冬に♂1羽

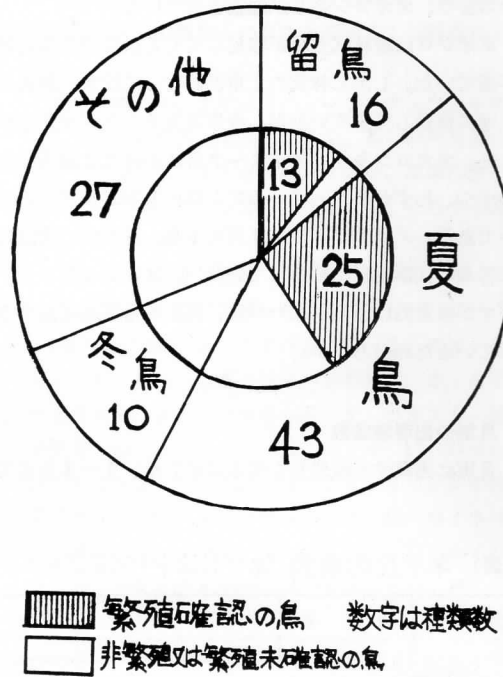
は26~32種と少なく、4月の渡りの時期が始まると急速に増加し、5月には70種と最高に達する。その後、徐々に減少している。8月に種類数が減少するのは、囀りが少なくなり、また木の葉が茂るなどのために相当の確認もれがあるためと思う。

これまで確認した96種のうち、おおむね毎年確認できるものを留鳥、夏鳥、冬鳥と分類し、さらに、これらいずれともいまだに分別できない種類、又はただ1回のみ確認した種類を一括してその他に分類した。以上の分類による種類数及び繁殖確認数を図3に示した。

留鳥は16種でシジュウカラの仲間が最も多い。カケスは一応留鳥に分類したが、6月から8月にかけて通常平坦部で見られることは非常に稀であるが、山部川沿いの林では夏季でも確認できる。留鳥のうち、これまで繁殖の確認されていないものはヒガラ、ハシブトガラス、カケスの3種である。

夏鳥としては43種が分類される。このうち繁殖の確認されたものはカッコウ、モズなど25種である。残りの未確認のものについても大部分は繁殖しているものと考えられる。

〔図3〕 生息時期別分類



科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考	
セキレイ	ハクセキレイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	'76に♂1羽林の中 '72に♀1羽	
	セグロセキレイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	キセキレイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	ビンズイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
レンジャク	キレンジャク		—		—						—				
ヒタキ ツグミ亜科	ノゴマ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	コルマ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	ジョウビタキ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	ノビタキ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	トラツグミ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	アカハラ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	クロツグミ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	マミチャジナイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	シロハラ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
ツグミ				—	—	—	—	—	—	—	—	—			
ウグイス亜科	ウグイス				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	ヤブサメ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	エゾセンニュウ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	メボソムシクイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	センダイムシクイ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	キクイタダキ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
ヒタキ亜科	オオヨシキリ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	キビタキ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	コサメビタキ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	エゾビタキ				—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	オオルリ				—	—	—	—	—	—	—	—			

冬鳥はキレンジャク、ツグミなど10種類が分類される。筆者はスキーが不得手なこともあり、毎年冬期間の観察の手を抜くので記録が非常に不十分なものとなっている。従って観察回数が増加によって種類数の増加及び棲息時期の明瞭化をはかる必要がある。

アネハヅルも確認

その他の分類の中には、多くの性質の異なる種類を入れてある。その他の分類をさらにいくつかに分類してみる。

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ミソサザイ	ミソサザイ													
シジュウカラ	ハシブトガラ													
	ヒガガラ													
	シジュウカラ													
	エナガ													
	ヤマガラ													
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													
キバシリ	キバシリ													
メジロ	メジロ													
ホオジロ	アオジロ													
	ホオジロ													'72冬1羽
	ホオアカ													
	カシラダカ													'71に♂1羽飛来
アトリ	シメル													
	イカワ													
	カワラヒワ													
	マヒワ													
	ウソコ													
	ベニマシコ													
	イヌカ													'72冬~'73春に大群
ベニヒワ													'73に♂1羽飛来	
アトリ	アカマシコ													
ハタオドリ	スズメ													
ムクドリ	ムクドリ													
	コムクドリ													
カラス	ハシボンガラス													
	ハシブトガラス													
	ミヤマカケス													
ツル	アネハヅル												'76に1羽飛来	
クイナ	バン													
	ビクイナ													'72に1羽飛来
シギ	イソシギ													
	オオシギ													
ガンカモ	ヤマシギ													
	オシドリ													
	スズガモ													'71に♂1羽飛来
	マガモ													'72に♂1羽飛来
	カルガモ													
	コガモ													

- ④ 春秋の渡りの時に1週間前後滞在する種類
ジョウビタキ、マミチャジナイ、シロハラ、クロジなど
- ⑤ 本来、いずれかの分類に入るが、1回確認したのみで、羊ヶ丘に定着していると思われない種類
コノハヅク、ノゴマ、オオルリ、アカマシコ、ミヤマホオジロ、アネハヅル、バン、スズガモ、コガモ、アカショウビンなど
- ⑥ ⑤と同じで数回確認された種類
カワセミ、エゾビタキ、オシドリ、マガモなど
これらのうち⑤と⑥の中に今後の観察によって羊ヶ丘の鳥として定着してくる種類が相当でてくると思う。一方、ミヤマホオジロ（1971）およびアネハヅル（1976）スズガモ（1971）の3種は今後恐らく確認されることは

ないと考えられる。アネハヅルは1976年7月19日から22日まで、農試の試験圃場に滞在し、夕方になると野幌方面へ飛び立ち、翌朝また元の場所に戻ってくるという状況であった。

以上、簡単に羊ヶ丘の鳥類について述べてきたが、振り返って見ると、データとして非常に不十分であり、今後、観察の頻度をより多くすると共に、個体数についての調査も行なわなければならないと考えている。

特に個体数の調査については、羊ヶ丘周辺の宅地化、羊ヶ丘の真ん中を通る国道36号線のバイパス計画等、今後環境の変化が相当急速にやってくることから必要と考えている。

（札幌市豊平区羊ヶ丘1 北農試宿舎C-1-4）

カワセミの観察



▲1976年5月5日＝千歳川にて

榊原茂樹¹⁾
佐藤世志人²⁾
高橋俊博³⁾

はじめに

1976年4月25日に国道36号線に近い千歳川筋で、偶然カワセミのつがいを見かけたことが、この観察の動機です。巣を確認したのは4月29日、巣穴は、千歳川の南に面した岸の土手に作られていました。以下、私たちの観察を紹介します。皆様の参考になれば幸いです。

- 4月25日 カワセミを初認
29日 巣穴を発見
5月2日 カワセミが巣穴に入るのを確認。1回目は2分間、2回目は45分間

- 5日 小魚を4匹捕える。巣穴に入った様子なし
6日 1羽、川上の方で確認
9日 姿を見ず

このカワセミの営巣は、結局、失敗に終わったようです。私たちは、カワセミが完全に巣を放棄してから3か月後の8月17日に、巣を掘り出してみました。

観察内容

清棲幸保博士の観察と私たちの観察とを対比してみました。

項目	清棲博士	私たちの観察
※巣穴の掘り方	水平	奥に行くほど高い
穴の深さ	0.5～1m	0.78m
穴の直径	6～9cm	縦7cm、横6cm
※産室		奥行18、幅17、高さ8、巣材の深さ3(cm)
巣材	やわらかい土・親の吐き出した骨	草の根・やわらかい土・かなり消化が進んでから吐き出されたと思われる小魚の骨
※巣の高さ	土手の上から30～70cm、地上から40～200cm	土手の上から110cm、水面から165cm

※ 清棲博士と私たちの観察とで若干異なる点。

考察

驚いたことに、このカワセミは、護岸工事をするために削られた土手に巣を作りました。なぜ、この神経質な鳥がこのような場所に巣を作ったのか不思議に思いましたが、一つだけ考えられることは、千歳川の土流と下流からの護岸工事に追い立てられ、しかたなく、ここに巣

を作ったのではないかということです。しかし、巣を作ったのはよいものの、続出する障害には耐えきれなくなって、営巣を放棄したのではないかと思います。

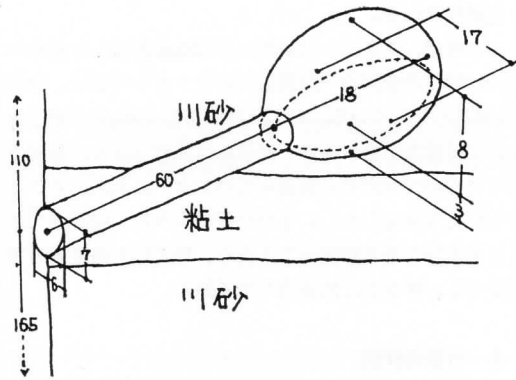
多くの資料では、カワセミはとまる木が一定しているといいますが、私たちの今回の観察では、あまり一定してはいませんでした。

(清棲幸保著「日本鳥類大図鑑」を参考にしました)

(1) 千歳市栄町 5 丁目)

(2) 千歳市栄町 5 丁目)

(3) 千歳市栄町 2 丁目)



コクガン

41羽の発見と生息状況

隅田重義



50.12.18 鹿野北海道新聞カメラマン撮影

1 はじめに

コクガン——マガモよりひとまわり大きく、全体が黒っぽく見える。特に頸と尾に目立った白斑がある。水面に浮かんでいる時は、尾の部分が高く白く見え、飛んでいる時は、尾に白玉をつけているようだ。

北極海沿岸、北米西海岸で繁殖、冬季に南下する。一昨年10月に根室と風連湖に大群が来ていたというが、今ごろの季節では、道内では、道南の函館湾内で見られない。以下、昨年の一斉調査の日に確認した状況を、今後の課題も含めて報告する。

調査日 51年1月16日(全国一斉調査の日)

調査地点 函館山(国設鳥獣保護区)と函館湾内

調査面積 4,600ha

調査距離 23km(1kmずつ23区分)

調査員 隅田、吉沢(鳥獣保護員)

越田、福島(猟友会会員)

見られた鳥 マガモ、コガモ、ホオジロガモ、クロガモ、キンクロハジロ、シノリガモ、ウミアイサ、ウミウ、オオハム、コクガン41羽

コクガンの発見場所 函館湾内(上磯町茂辺地海岸約500m沖合)

2 調査地点の状況

上磯町茂辺地海岸は、北海道の海岸の三大特徴である海岸段丘になっている。ここにはマガモ、ウミガモ類の大群が集結し、避難するのに好条件のところである。調査した1月16日は絶好の日和。北国にはまれにみる風のない春のような海だった。我々は双眼鏡のとどく限り1kmずつ進んではその地点でゆっくり観察、判別して調査表に記入した。

3 コクガンの生息状況

コクガンは、4、5年前からこの海岸にきている。ここは磯つづきで遠浅であり、小魚類や海藻類も豊富なうえノリの養殖が盛んでコクガンの主食とする海藻類も豊富なので好条件である。

この日は北海道新聞函館支社の記者と鹿野カメラマンも同行。鹿野カメラマンは一昨年12月、この海岸でカモメに混じって休んでいた1羽のコクガンを見つけ、すばらしい写真を撮っている。

茂辺地海岸約500m沖合に2群のコクガンが双眼鏡で確認された。30羽と11羽の群れである。そのほか沖合にも黒い群れを確認したが、あるいはコクガンだったかもしれない。というのは50年2月末、吉沢鳥獣保護員はこの海岸で調査中に、尾に白い玉をつけたような特徴のある200羽以上の大群を確認したとの報告があり、コクガンではなかったかと思われる。今後もさらに増えるも

のと期待される。

この時期、コクガンは道南の茂辺地海岸でしか見られない。50年の全国の一斉調査でのコクガンの数は、全国で202羽となっている。いずれにしても日米、日ソ渡り鳥条約の保護鳥であり、さる46年には天然記念物に指定されているのでマガモと間違っただけに狙われることのないよう切望したい。また一般の人々にも保護鳥であることを知らせる好機会でもあり、地元の上磯町教育委員会でも、呼びかけに協力してくれた。

4 今後の課題

我々は、調査に当たっては、正確に判別し、報告することによって、またとない貴重な資料を提供する責任が、実に大きい。珍鳥を発見し、生態を研究し、克明に解説する以上に、重要な使命のあることと思う。

道の自然保護課鳥獣保護係長、野村梧郎さんは「地球全体が、クリーンにならなければ」と強調している。その基本は、人も渡り鳥も共に生きる環境ということで、普遍の真理である。

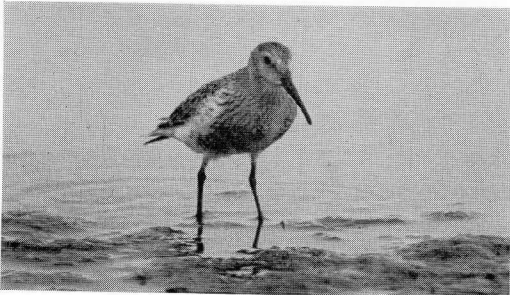
我々は今、人間社会への政治と同様に、鳥社会への政治を、真剣に考えなくてはならない時機に際している。

我々は学者のまねをするのではなく、傷ついた一羽の鳥、弱っている一羽を救い、湿地、環境保全のため、総力をあげて取り組む努力が必要であることを、人にも自分にも叫ばなくてはならない。

(北海道鳥獣保護員 函館市八幡町13の16)

ハマシギ

撮影 野村梧郎



本州の野鳥たち

入江 智一

長い間北海道に居住していた私は、仕事の都合で、短い期間でしたが、本州の野鳥たちの優雅な姿に接することができました。北海道の方は本州の野鳥について、道内にいる鳥も本州にもいるのではないかと、およその見当を持っていることと思います。

種名	月	1	1	2	3	備考
ミミカイツブリ	1	26			13	
カイツブリ	1	6			18	
コサギ	1	6			18	
カルガモ	1	20			13	++
マガモ	1	6			18	+
ハシビロガモ	1	6			18	
ヒドリガモ	1	23		11		
オナガガモ	1		15		19	
コガモ	1	6			18	+
キンクロハジロ	1	23		11		+
ズガモ	1	23		31		
ホシハジロ	1	6			18	++
ヤマドリ	1	23		2		
コジュケイ	1	6			18	
オオバン	1	26			18	
ハマシギ	1		17		6	
シロチドリ	1		8			
ユリカモメ	1	25			13	+
オオセグロカモメ	1		15	6		
ハイタカ	1	8				
トビ	1	23			20	
ハシブトガラス	1	25			20	
ハシボンガラス	1				20	
キジバト	1				20	
ヒバリ	1		26		20	
ビシズイ	1		24		20	
キセキレイ	1		12			
ハクセキレイ	1	13			18	
ショウドウツバメ	1	14				
ジョウビタキ	1		1			
ツグミ	1	25			20	
ヒヨドリ	1	13			26	
モズ	1	6			6	
カシラダカ	1	23			13	
アオジ	1			25	4	
ホオジロ	1	23			6	
カワラヒワ	1		12		4	
スズメ	1	23			20	+
ムクドリ	1	26			20	+

—— 生息期間 生息推定期間
 ○ 観察日 + 観察数の多いもの

しかし私が本州地方で感じたことは、環境の違いや季節感の相違によって観察できる野鳥は、幾分でしたが違っているように思いました。

今回の発表にあたり、その概要を付け加えておきます。場所は、千葉県内でも冬鳥の渡来地として有名な印旛沼を選びました。この沼は、今日ではある会社の工業用水沼として使われていますが、環境に恵まれた地域にあって、沼の周りは田園風景が一面に続いています。北海道内で言うならば、ウトナイ湖を思わせる所でもあります。

観察した期間は、ちょうど冬季にあたる11月中旬から3月中旬まででした。このころの北海道は、当然のように雪が積もり、周囲は一面の銀世界でしょうが、関東地方では毎日のように晴れの日が続く、雪はめったに降らず、また異常乾燥注意報が出されればなしという始末です。雪を見慣れた者にとっては物寂しさを感じます。

気候のこと一つを取っても大きな違いが見られ、そこには歴然とした動物分布の差があっても不思議ではないでしょう。

(福岡県鞍手郡宮田町長井鶴碕入口 入江一方)

❀ **野鳥だよりの原稿を** お寄せ下さい。編集部では、今年度中に27号まで出すため、張り切って取り組んでおります。観察記録、随筆、意見など内容はなんでも結構です。今まで書いたことのない方、特に歓迎します。原稿は25字どりの横書き原稿用紙に書いて下さい。原稿用紙の必要な方は編集部まで連絡下さい。送ります。

❀ **図・絵は白い紙に** 黒インクか墨で大きめに書いて下さい。紙はケント紙か画用紙です。鉛筆やボールペンで書かれたものが寄せられますが、無理して使っても不鮮明で、資料としての価値が失われます。編集部で書き直している点を斟酌され、是非ご協力下さい。



探鳥会と懇談会のお知らせ

つぎのとおり探鳥会と懇談会を開催しますので、多数の参加をお願いします。知り合いの方、また会員でない方の参加も歓迎します。誘い合わせの上、どうぞ参加ください。

<藤の沢探鳥会>

- ◇とき 昭和52年1月30日(日) 10:00~14:00
- ◇ところ 札幌市南区藤野2区 白鳥園
TEL 591-8317
- ◇内容 札幌の郊外「藤の沢小鳥の村」の名誉村長小沢広記さん宅の給餌施設に集まる野鳥を観察します。
例年、アカゲラ、シジュウカラ、ハシブトガラ、カケス、ヒヨドリなどが見られ、昨年はアトリが初めて給餌場にきました。室内から観察できます。
- ◇担当 小沢広記参与・平井さち子幹事
- ◇交通 定鉄バス定山溪線「藤の沢」停留所で下車し、白鳥園まで徒歩15分くらい。所要時間は、札幌駅前から藤の沢まで40分くらい。合計約1時間。
- ◇持ち物 昼食、観察用具。
- ◇参加費 1人 200円。
- ◇その他 雪が降っても行きます。昼食時にぶた汁を用意します。

<野幌探鳥会>

- ◇とき 昭和52年2月20日(日) 9:00~14:00
- ◇ところ 国鉄「大麻駅」待合室に午前9時までに集合。野幌森林公園内大沢園地周辺を歩きます。歩く距離は約10キロメートル程度です。
- ◇担当 柳沢信雄幹事・新宮康生幹事
- ◇持ち物 昼食、観察用具。森林内を歩くので、歩行に適したスキーが必要です。
- ◇その他 吹雪でない限り行きます。防寒等の用意を十分に。

<ウトナイ湖探鳥会>

- ◇とき 昭和52年3月27日(日) 10:00~14:00
- ◇ところ 苫小牧市植苗のウトナイ湖畔観光ホテル前(ウトナイ遊園地バス停車)に午前10時までに集合。
- ◇担当 新妻 博幹事・小川 巖幹事
- ◇その他 雨天又は吹雪でない限り行きます。

<新年懇談会>

- ◇とき 昭和52年1月29日(土) 14:00~17:00
- ◇ところ 札幌市中央区北4条西5丁目
北海道林業会館(3階A会議室)
TEL 251-4151
- ◇内容 会員作製のスライドや8ミリ映画の観賞と懇談

照会等の連絡は、北海道自然保護課鳥獣保護係(札幌市中央区北3条西6丁目 TEL 231-4111 内線3893番)へ。

鷓川探鳥会

〔日時〕 51年8月29日 9:30~14:00 晴

〔担当幹事〕 羽田恭子・梅木賢俊

〔見られた鳥〕 1 ムナグロ⑭ 2 ノビタキ 3 ヒバリ 4 ホオアカ 5 オオジュリン 6 スズメ 7 ニュウナイスズメ 8 イソシギ① 9 ムクドリ 10 ツバメ 11 キジバト 12 ダイゼン⑤ 13 カワラヒワ 14 ハクセキレイ 15 オオソリハシシギ④ 16 アオアシシギ② 17 ソリハシシギ⑩ 18 ユリカモメ 19 キアシシギ① 20 トウネン⑩ 21 チゴハヤブサ 22 アオサギ 23 チュウシャクシギ① 24 ハマシギ① 25 オオシシギ① 26 ウミネコ 27 ハシボソガラス 28 コサメビタキ 29 トビ 30 ショウドウツバメ 31 メダイチドリ⑧ 計31種類(シギ・チドリ類は個体数を記入)

〔参加者〕 小林清勇、関野正一、巨野寿衛吉、新宮康生、柳沢千代子、溝部泰子、早瀬広司、野々村菊、井上元則、名徳秀男、速水藤二郎、宮崎政寛、小山政弘、坂本忠司、佐藤辰夫(順不同)



鷓川探鳥会

岡田幹夫

私はアジサシ、今日は日曜日なのにぞろぞろと連れだってくるこの連中を観察することにしよう。双眼鏡やプロミナーをもって、リュックをかついで、身なりも決してカッコイイとは言えないこの連中であるが。

もう5~6年も前の頃からだろうか。その頃は人数も双眼鏡をもっている者も少なく、プロミナーも1~2台程度だったが、今日の様子をみると双眼鏡はもちろんのこと、プロミナーは8台も持ってきている。

この連中が牧場の牧柵を越えて鷓川支流に出て最初に見た我々の仲間はコオバシギ。連中はプロミナーを交代でのぞき込み、声を上げている。ソリハシシギ、アオサギ、トウネン、コガモ等を観察しながら手帳に記入している様子。今日は曇り空ながら風もなく穏やかな日和。この連中もきつとやってくるよかったですと思っている。 ↗

↗ だろう。

この鷓川河口周辺は、我々渡り鳥が翼を休めたり、魚や干潟の生物を食べて体力をつける場所。この連中は、昭和50年秋に82種類もの鳥を見ている(野鳥だより22号)。

鷓川本流では、オオソリハシシギ、チュウシャクシギなど更に記録が多くなったようで、喜びの声も多くなった。この連中も、さすがに疲れたのか、草原に座りオニギリを食べ出した。時間は11時30分頃、そろそろ満潮。私も休むとしよう。

〔日時〕 51年9月19日 9:40~13:30 晴

〔担当幹事〕 野村梧郎・岡田幹夫

〔見られた鳥〕 1 コオバシギ① 2 モズ 3 スズメ 4 ヒバリ 5 ソリハシシギ① 6 トビ 7 ユリカモメ 8 ハクセキレイ 9 ホオアカ 10 アオサギ 11 トウネン⑩ 12 コガモ 13 ハマシギ⑩ 14 チュウシャクシギ② 15 オオソリハシシギ⑩ 16 ダイゼン⑦ 17 キョウジョシギ② 18 ウミネコ 19 アジサシ 20 ツバメ 21 チュウヒ 22 オオジュリン 23 メダイチドリ① 24 カワラヒワ 25 ハシボソガラス 26 ハシボソガラス 27 ノビタキ 28 イ

ソシギ① 29 シメ 30 キアシシギ① 31 ムクドリ 32 キセキレイ 33 アオアシシギ⑤ 34 ムナグロ 35 ビンズイ 36 カモ類(ヒドリガモ?) 37 ハジロクロハラアジサシ(未確認) 計35種類(シギ・チドリ類は個体数を記入)

〔参加者〕 巨野寿衛吉、斉藤禎男、佐藤世志人、榊原茂樹、野村梧郎、萩千賀、早瀬広司、早瀬富、速水藤二郎、新妻博、羽田恭子、溝部泰子、柳沢千代子、小野寺敬子、門脇松次郎、宮崎政寛、宮崎英里佳、野々村菊、石川絢子、高野英二、梅木賢俊(順不同)

(札幌市中央区南15条西18丁目 地方公務員)

鷓川の探鳥

井上元則

1976年10月17日は日本晴れの和風、探鳥会には絶好の日和で、心ゆくばかり秋の干潟の鳥を楽しんだ。

例によって鶴川牧場入口の草原から探鳥が始まった。間もなく一行は白いムクドリがいるとあって、クロバー畑で採食している小群に目を向けた。私は白いムクドリは田舎からでてきたばかりで、しゃばの空気で汚れていないからだろうといたら、誰かが白いのを「無垢」というのではないかと、しゃれをとばし朝の緊張をほぐしてくれた。

いよいよ牧場の柵をこえて、平らな広い牧場に入るとホオジロ、ホオアカなどが見つかった。海を向いて進むと左側の小川の先方 300m 付近にコガモの群 9 羽がプロミナーでキャッチできた。姿は見えないが、時折りダイゼンの声がピューウィ、ピューウィと聞こえる。

小川が鶴川の旧河川にそそぐ付近に干潟ができるのだが、今日は11時になっても干潟が姿を見せない。しかし干潟となる場所はもう浅瀬になって、カモメ類が 400 羽ほど集まっている。羽田さんがミツユビカモメ、ユリカモメを検出した。400羽の大部分はウミネコ、ユリカモメ、ミツユビカモメ、セグロカモメ。

11時になってもまだ干潟が現れないので、シギ、チドリも現れない。一行は荷物を置き、右折して湖岸の西方を探鳥し、オオソリハシシギ 4 羽を見つけた。うち 1 羽は足を負傷しびっこをひいている。健全な鳥と比べると傷ついた鳥はとてつ痛々しくかわいそうでならない。

昼食後、まだ1時にならないのに、一行は小川を渡り左岸の干潟を観察に出かけた。この干潟は広く、ちょうど時間帯がよかったので、たくさんのシギを見ることができた。ミユビシギ 27、ハマシギ 40、トウネン 10、ムナグロ 20、ダイゼン 55 羽。このほかセグロカモメ、オオセグロカモメ、ミツユビカモメ、ウミネコなど 300 羽ほどの群が別の干潟に群をなしていた。その中にはアジサシ(くちばしと足の赤い亜種)も少数認められた。

この日は 2 時まで皆熱心に探鳥し、汽車の時間に遅れそうになるのも忘れていたのには頭が下がった。

〔日時〕 51年10月17日 9:35~14:00 快晴

〔担当幹事〕 井上元則・巨野寿衛吉

〔見られた鳥〕 1 カワラヒワ 2 ムクドリ 3 ビンズイ 4 トビ 5 ハクセキレイ 6 スズメ

7 ノビタキ 8 アオジ 9 タヒバリ 10 ホオジロ 11 コガモ 12 オオジュリン 13 シジュウカラ 14 オオソリハシシギ 15 ユリカモメ 16 ウミネコ 17 セグロカモメ 18 ミツユビカモメ 19 モズ 20 オオセグロカモメ 21 ウミアイサ 22 ツルシギ 23 ハシボソガラス 24 ヒガラ 25 ダイゼン 26 ムナグロ 27 ハマシギ 28 メダイチドリ 29 ミユビシギ 30 キョウジョシギ 31 トウネン 32 アオアシシギ 33 アジサシ 34 キジバト 35 ホオアカ 36 タシギ 37 ハヤブサ 38 アオサギ 39 ヒバリ 40 不明カモ 計40種類

〔参加者〕 山崎カツエ、羽田恭子、馬場錬成、野々村菊、柳沢信雄、柳沢千代子、津田新平、梅木賢俊、萩千賀、名徳秀男(順不同)

(江別市元野幌 291)

ウトナイ湖探鳥会

松岡 茂

探鳥会の前日は、大型低気圧の接近で荒れ模様。当日もまた、低気圧の影響で今にも降りそうな天候だった。このためか、参加者はきわめて少数だった。

〔日時〕 51年10月24日 10:00~15:00 曇天

〔担当幹事〕 土屋文男・松岡 茂

〔見られた鳥〕 1 オオジュリン 2 アオサギ 3 ムクドリ 4 ツルシギ 5 マガモ 6 ヒドリガモ 7 コガモ 8 カルガモ 9 オナガガモ 10 スズガモ 11 チュウビ 12 トビ 13 ハクセキレイ 14 ハシボソガラス 15 ユリカモメ 16 シメ 17 オオハクチョウ 18 ヒシクイ 19 ハシビロガモ 20 ミミカイツブリ 21 ホシハジロ 22 カワアイサ 23 小型シギ(ハマシギ?) 24 オカヨシガモ? 25 オオタカ? 計25種類

〔参加者〕 早瀬広司、溝部泰子、岩泉ゆう子、梅木賢俊 松岡千代子(順不同)

(北海道大学農学部大学院生)

帯広の探鳥会

藤巻 裕 蔵

一昨年の12月から帯広でも毎月1回の探鳥会を行っている。今のところ探鳥会の場所は緑ヶ丘公園である。この公園は市街地のほぼ中央にある。一部は陸上競技用のグラウンドや動物園となっているが、カシワ林やまた野草園となっている所では自然林の状態が残っており、鳥



帯広・緑ヶ丘公園

を見て歩くには手頃な所である。

これまで十勝地方では愛護会主催の探鳥会は行われなかったようである。現在、帯広だけでなく十勝地方全域でも会員はわずか4名。これでは札幌のように活発に探鳥会を行うのは無理かもしれない。そこで会員でない人も含め、周囲に呼びかけて探鳥会を行うことにした。

50年12月14日(第1回)。帯広は寒い所である。晴れていても風が冷たい。しかし雪が少ないので、人通りの少ない公園も普通の足ごしらえて歩くことができる。

エナガとゴジュウカラの混群に出会ったあとは、シジュウカラが1、2羽道を横切るのを見たり、ツグミを5羽観察したくらいで、小鳥類は少ない。ツグミは冬も留まっているようである。上空にはトビが22羽も数えられた。この日観察したのは8種であった。参加者9名。

51年1月18日(第2回)。前回と同じように小鳥が少ない。公園には針葉樹が少ないせいであろうか。双眼鏡が活躍するのはカラ類混群に出会ったときだけである。この日の群の構成員はゴジュウカラ、エナガ、ハシブトガラであった。シジュウカラはいても群には入らないようである。公園内にはカラスが多く、ハシボソもハシブトも見られた。この日の記録は10種。参加者3名。

2月15日(第3回)。この日も快晴。冬には珍しく暖

かな日となった。この頃になると日も長くなり、小鳥たちもよくさえずる。ゴジュウカラ、シジュウカラが歌い、ハシブトガラが時々思い出したように短く鳴いていた。ヒヨドリはうるさいほどよく鳴いた。キクイタダキ、アカゲラ、ヤマゲラ、シメが緑ヶ丘探鳥会で初めて見られた。この日は13種を観察した。参加者5名。

3月21日(第4回)。晴れてはいたが、風が強く冷たかった。そのせいか、春が近いというのに小鳥は前回よりも少なかった。でもさえずりは先月より活発になっている。シジュウカラ、ゴジュウカラがよくさえずり、ハシブトガラもこれに劣らず歌っていた。コガラとハシブトガラの区別は姿を見ただけではむずかしいが、聞こえてくるさえずりの中にはコガラの声がないので、この公園にはコガラはいないのかもしれない。

帰りぎわ、自転車道沿いの木にいるキレンジャク5羽を見つけた。この日の記録は8種。参加者2名。

これまで4回の探鳥会を行ったが、一年のうちでもっとも鳥の少ない時期だったので、毎回観察されるのは10種を越えなかった。現在、緑ヶ丘公園探鳥会の鳥のリストは16種である。春から夏にかけて鳥が多くなる季節がやってくる。鳥のリストもずっと増えるだろう。

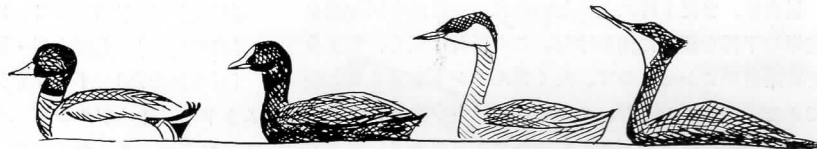
(帯広市稲田町西2線15番地 帯広畜産大学宿舎)



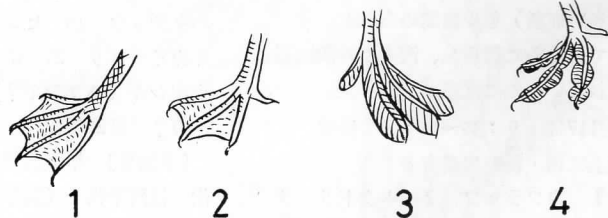
私たち

- A マガモ
 - B オオバン
 - C アカエリカイツブリ
 - D ウミウ
- は水鳥で泳ぐことができます、

足は泳ぐのに適した型をしています。でも足は水の中で見えません。下の絵の1~4の足のうち、どの足がどの鳥のものでしょうか。答えて下さい。(出題：藤巻裕蔵)



A B C D



〔答〕 A-2、マガモ類の鳥には前方の足指だけに水かきがあります。B-4、足指は水鳥類では4本の足指全部に水かきがついています。D-1、ウミウ類では4本の足指全部に水かきがついています。C-3、カイツブリ類の足指は、ホートのかいの上

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

☆ この号を編集集中の年末30日、息ぬきに我が家の窓から外を見ると、なんと向かいの塀の杭をつつくアカゲラの雌一羽。都心から歩いて30分の豊平の町なか。旧友に会ったような嬉しさと、ここまで採餌に来なければならぬ破壊された自然環境を考え、複雑な気持ちでした。30分後の夕方4時ころ、近くで

ツグミの番らしい2羽。仲良くポプラの梢にとまっていた。

☆ 編集委員の皆さんが忙しいため、私一人の編集になりました。統一がとれる反面、独断的になるおそれがあります。お気づきの点ご指摘下さい。それにしてもこの編集部、様々の課題を抱えているようです。(1月5日 森記)